

投資量に対する施工力確保の考え方

2022年10月26日
九州電力送配電株式会社

当社の主要品目別の施工量について

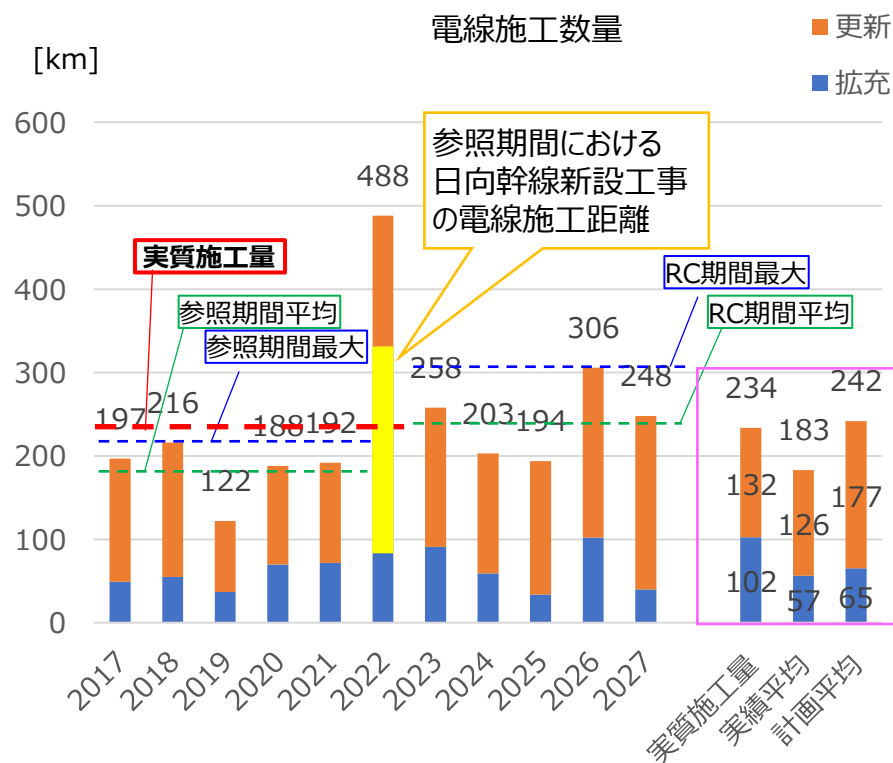
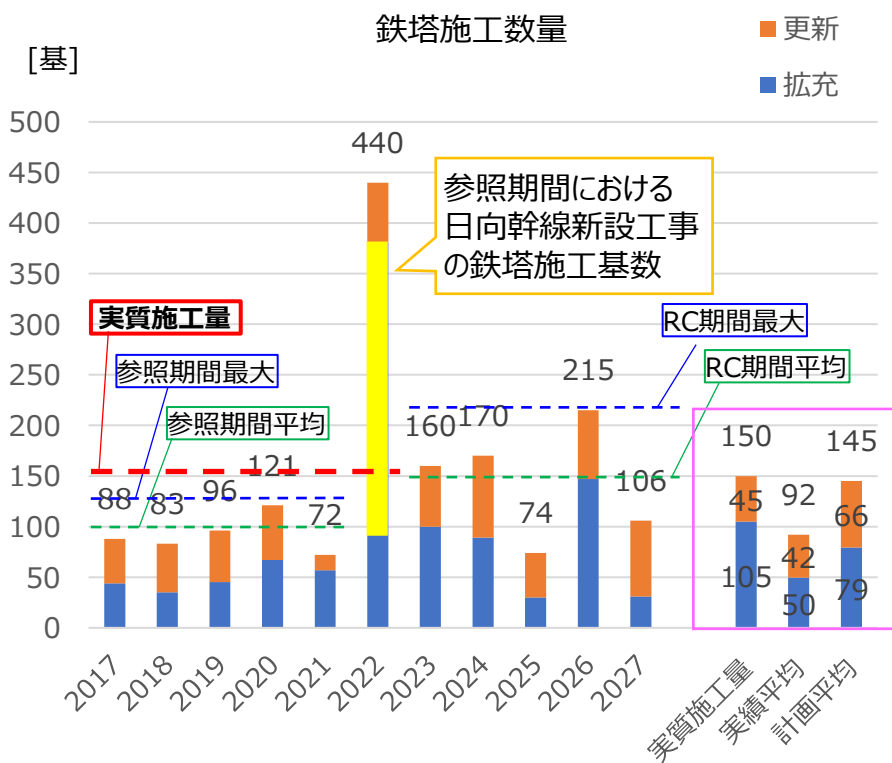
1

- ✓ 当社では仕様や調達・充当する施工力（工事会社）等が異なる以下の施工分類で第1規制期間において必要となる施工力を評価し、実施可能な施工量を計上しております。
- ✓ 参照期間最大年間施工量を超過する送電設備については、500kV日向幹線新設工事（2022年度竣工）に要した人員の配分等により、必要な施工力を確保しております。

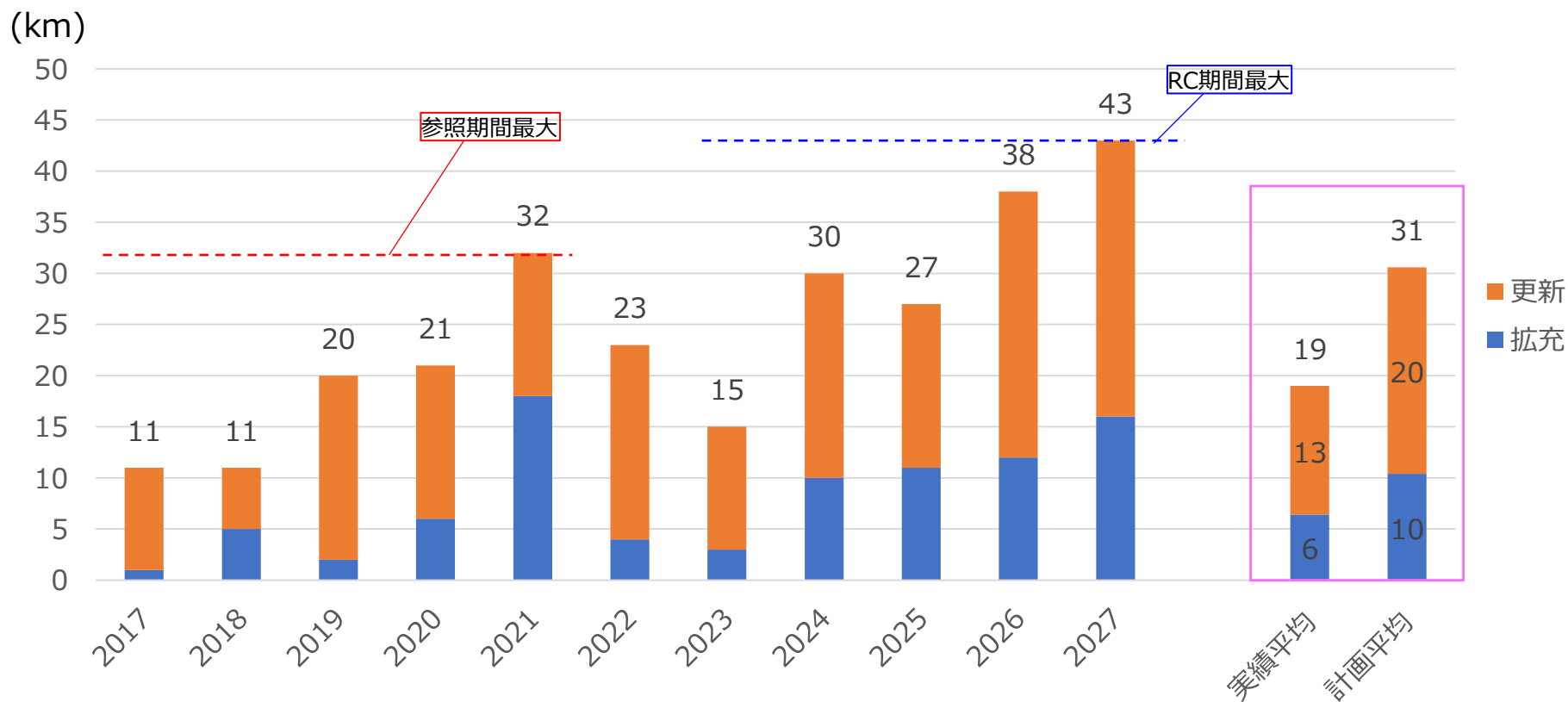
施工分類	主要品目	施工力の評価	参照期間最大 年間施工量※	RC期間年間 最大施工量※	備考
送電設備 (架空)	鉄塔	・架空送電関係の設備工事（鉄塔・電線・その他）に必要となる施工力を評価し、実施可能な物量を計上 ・日向幹線新設工事（2022年度運開）に要した施工力の配分によって十分な施工力を確保	121基	215基	P2参照
	送電線		216km	306km	
送電設備 (地中)	地中送電 ケーブル	・地中送電関係の設備工事（ケーブル・その他）に必要となる施工力を評価し、実施可能な物量を計上 ・施行体制の見直しにより、物量増に対応	32km	43km	P3参照
変電設備	変圧器	・変電関係の設備工事に必要となる施工力を評価し、実施可能な物量を計上	29台	24台	
	遮断器		68台	67台	
配電設備 (架空)	コンクリート柱	・架空配電設備の設備工事（コン柱・高低圧線・柱上変圧器・その他）に必要となる施工力を評価し、実施可能な物量を計上	30,703本	28,622本	
	配電線		8,265km	7,489km	
	柱上変圧器		36,471台	30,211台	
配電設備 (地中)	地中配電 ケーブル	・地中ケーブルの布設に必要となる施工力を評価し、実施可能な物量を計上	88km	79km	

※竣工施工量 参照期間中の最大を超過

- ✓ 参照期間（2017～21年度）における施工量（竣工ベース）は鉄塔92基/年、電線183km/年ですが、同期間中に継続的に建設を行っていた500kV日向幹線（2022竣工、鉄塔：291基、電線：248km）を加味した実質施工量※（2017～22年度平均）は鉄塔150基/年、電線234km/年です。
 - ✓ 第1規制期間では鉄塔145基/年、電線242km/年の施工を予定しており、日向幹線新設工事を含めた実質施工量と同水準であるため、実施可能と判断しております。
- ※数年に亘る工事の場合、竣工年度に総量が一括計上されるため、支出時期に応じた施工物量を考慮する必要があります。



- ✓ 参照期間は地元施工会社による延線、ケーブルメーカーによる接続工事を行う体制でしたが、第1規制期間においては施工力上限となっている接続工事の施工力強化策として、新たに地元施工会社でケーブル接続作業員の人材育成を行うことにより接続工事班を増やします。
- ✓ これにより、約30km/年程度の施工が可能と判断しています。
(2017－2021平均：19km/年、規制期間：31km/年)



施工力維持・確保に向けた取組み

- ✓ 当社は、施工会社と密に連携し、施工力の把握や働きやすい職場づくり等に取り組んでいます。
- ✓ また、必要に応じて九州内外で電工を融通することにより、施工力の柔軟な確保に努めております。
- ✓ なお、施工業者の高齢化を踏まえた施工力確保に向けて、電工の認知度向上を図るべく、電工PR活動やリクルート活動の円滑化を行うとともに、電工のモチベーション向上のための現場作業の自動化・省力化等に引き続き取り組んでまいります。

送電電工のリクルート活動の円滑化

- 送電電工PR用動画を業界団体とともに制作し、SNS等のメディアを通じ、主に学生に対して送電電工の仕事内容や魅力を発信

(リクルートパンフレット)

大空を駆けぬげる電気の道。それをつなぐのが、俺たち送電マンだ!!



(送電電工PR用のWEB動画)

YouTube動画

第1弾：2019年4月～配信



第2弾：2020年5月～配信



現場作業の自動化・省力化

- 作業環境が過酷な送電工事において、高性能ドローン等の最新技術を活用

(現場への通勤や運搬作業の省力化イメージ)

- ✓ 徒歩による通勤や人肩運搬の排除
- ✓ 多機能アシストスーツの採用による地上作業の重労働排除

